

新聞投書文における日本語学習者の仮定的「条件」の使用実態 —機能アプローチから—

花井 愛

1. はじめに

日本語の条件表現は、他の言語にはあまり見られない多様な類義表現を有しており（益岡 1997）、今まで数多くの研究がなされてきた。しかし、その多くは「と」「ば」「たら」「なら」の4形式（以下、4形式）に焦点を当て、その詳細な用法や、四つの形式間の関係、使い分けなど日本語学的な立場からの研究が多くを占めてきた。そのため、学習者がどのように「条件」表現を習得していくか、また4形式を用いないときにはどのような表現を使用するかといった観点からはあまり研究がなされておらず、学習者の習得過程が明らかになっているとは言えない。そこで本研究は、学習者が特定の言語形式にどのような意味機能を担わせ、且つある概念を表すときにどのような言語形式を使用するかを見ていく必要があると考え、機能アプローチ（以下、FA）を用いる。さらに、「条件」の中でも仮定的なものに焦点を当て、形式と機能の両面から分析を行う。

2. 先行研究と研究課題

2.1 機能アプローチとは

迫田（2002）によると、FAとは言語形式が意味や語用論的機能に動機づけられるとする機能主義を踏まえて、形式と機能の両面からの分析を試みる研究手法である。また、研究対象はL2知識だけでなくその運用にまで広げ、文レベルではなく談話レベルでの言語形式が意味するところを明らかにする（中浜 2015）ことを目的としている。FAには2つのアプローチ方法、form-to-function approach と function-to-form approach がある（Long & Sato 1984, Ellis & Barkhuizen 2005, 大関 2008, Mitchell, Myles & Marsden 2013, Bardovi-Harlig 2015）。前者は、目標言語形式に学習者がどのような機能を担わせているか、つまり形式から機能を分析する方法である。後者は、目標言語形式だけを見るのではなく、様々な概念や機能を学習者がどのように表しているか、つまり機能から形式を分析する方法である。このようなFAを用いた研究は主に欧米で行われてきたが、日本語に関する研究はまだ多くはない。

2.2 先行研究からの課題

本研究では、「条件」表現を対象とする。日本語の「条件」表現は、他の言語にはあまり見られない多様な類義表現を有しており（益岡 1997）、上級学習者でもその習得は難しい。さらに、「～時」などの時間性表現や、「から」「ので」などの原因・理由とも重なる部分があるとされ（豊田 1977, 網浜 1990）、「条件」表現以外の形式で表現することも可能である。このことから、どのような言語形式にどのような機能を担わ

せているかを見るという研究目的に適した分析対象であると考え、研究対象に選んだ。

「条件」表現に関する FA を用いた研究は、横瀬 (2001)、大関 (2008) がある。

横瀬 (2001) は **function-to-form approach** を用いて教室学習者、自然習得者を対象に分析している。その結果、文脈依存¹はなく、目標言語形式が出現する前段階の形式として「もし〜」「〜た」「〜は」を使用することを挙げている。この「もし〜」単独で表す傾向は、自然環境学習者の初級・中級各 1 名、教室環境学習者の初級・中級・上級の各 1 名で見られたと記載がある。さらに、教室環境学習者のみ「〜から」「〜て」を使用することを挙げ、初級 2 名には「もし〜から」、上級 1 名には「もし〜て」のような表現も観察されている。

大関 (2008) はロシア人自然習得者 1 名を対象に、初級の上から中級の下における 9 ヶ月間の縦断研究を行い、**form-to-function approach** と **function-to-form approach** 双方向から分析を行っている。その結果、目標言語形式が出現する前の I 期では「もしも」を前置し、接続形式を使わずに 2 文を並べる傾向などを指摘し、II 期では「たら」「と」の使用が始まるとしている。そして III 期には「と」の使用が大きく増えるが観察期間の最後まで最も多く使用されたのは「もしも」を前置する形であったと述べている。さらに、「たら」「と」は明確に異なる機能が結びつけられ、「たら」については、II 期では確定条件²は「たら」のみで、仮定条件は「もしも〜たら」という異なる形で使われ始めていたとしている。一方「と」については、仮定的な条件を表す場合には使われず、「〜すると、いつもある状態になる」ことを表すという意味機能が「と」と結びつき、まずはそのスキーマに合う場合から使われ始めたと考察している。

横瀬 (2001)、大関 (2008) の結果には共通して、本稿における仮定的「条件」に、「もし」「もしも」といった仮定を連想させる語句を付随させていた。さらに、インドネシア語を母語とする初級中期の学習者を分析した田中 (2005) でも、「もし〜たら」の代わりに「もし〜て」を使用する、田中の言うところの「て」ストラテジーを用いていることが言及されている。このように、「もし」や「もしも」などの仮定を連想させる語句を用いることは、多くの学習者に共通した中間言語である可能性があり、一般化できる可能性もあると考える。

¹ 横瀬 (2001) は、文を「並列」させるなど、文脈によって発話意図が伝わる場合を「文脈依存」としている。

² 大関 (2008) では、「条件」を確定条件と仮定条件の二つについて言及している。

また、接続辞表現の使用の広がり进行分析した峯 (2015) では、認知的に易しく、産出の際の思考的負担の少ないものから使用表現が広がるとし、事実的なものから仮定的なもの、順接から逆接へとその広がりが見られると指摘している。峯 (2015) によると、この広がりの傾向は、第二言語の発達過程における学習者の思考の傾向、つまり2つの出来事をもどのように関連付けて表現するかといった発話意図を反映するものである。より単純な認知能力で使用可能なもの、つまり産出の際の思考にかかる負担が少ない表現から使用が広がっていくことを示唆するとしている。そのことについて、峯 (2015) は以下のように説明している。まず、Solbin (1993) では母語習得と同じく、成人であっても認知的に易しいものから習得が進む傾向が見られ、Takano & Noda (1993) では慣れない外国語環境では一時的に思考力が低下した状態になると述べている。それを踏まえ、峯 (2015) は日本語能力がまだ低い学習者の場合は、言語処理を自動的に行うことができないため、限られたワーキングメモリの中で言語処理を行い、同時に概念処理も行わなければならないと述べている。最初は、言語処理を意識的に行うために、言語処理が占めるワーキングメモリの割合が大きく、その分、概念処理に充てられるメモリは少なくなってしまう。その結果、思考は負担の少なく、伝達上必要性の高い概念に偏る。したがって、学習者の使用する表現は産出の際の思考の負担が少なく伝達上必要性の高い表現に偏り、そのような表現から自動化が進んでいくと考えられるとしている (図 1³参照)。

峯 (2015) は、接続辞表現の発達の全体像を捉えようとした研究であり、条件表現の中での事実的なもの・仮定的なものという点については確認していない。しかし、条件表現の機能の発達に着目したニャンジャローンズック (2001) では、事実的な表現が先に使用され、「仮説」や「反事実」を表すものは習熟度がある程度高くなければ使用されないという結果が出ている。このことから小柳・峯 (2016) は、個々の形式の習得においても「事実的なもの⇒仮定的なもの」という形で使用が発達する傾向があると述べている。

以上の先行研究から考えると、産出の際の思考的負担が少ないとされる事実的「条件」は他の語句で意味概念を補足する傾向にないが、思考的負担が高いとされる仮定的「条件」では他の語句で補足しながら表現する可能性が考えられる。

一方、先行研究からの課題として、まず対象者のレベル統制並びに対象者数に関する問題点が挙げられる。横瀬 (2001) はレベルの判断基準が調査者の判断とされ主観的であり、大関 (2008) は1名の学習者だけの結果で且つレベルが初級の上～中級の下と限定されている。つまり、中上級学習者の使用実態はまだ明らかにできていない。

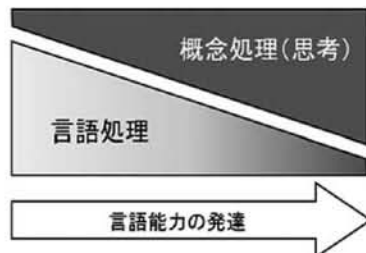


図 1 峯 (2015) における言語処理の発達と概念処理の関係

³ 峯 (2015) を参考に、筆者作成。

さらに、横瀬 (2001)、大関 (2008) とともに即時的な反応である話し言葉を対象にしており、書き言葉は対象としていない。日本語の「条件」表現は「と」「ば」「たら」「なら」という四つの形式が存在し、その使用範囲や使い分けも複雑なため、学習者にとっては学習困難な項目の一つであり、上級になってもその習得は難しいとされている。実際、横瀬 (2001)、大関 (2008) とともに、産出された発話には不自然な使用も多く、話し言葉だから不自然な使用となったのか、書き言葉であれば自然な使用が可能なのか、もしくは書き言葉でも不自然な使用が見られるのかといった書き言葉の使用実態は明らかになっていない。そこで、本稿では十分に時間が与えられ、モニター機能の働く書き言葉の使用実態を分析したい。

以上を踏まえ、中上級学習者の書き言葉を対象に、仮定的「条件」をどのように表現するかコーパス調査を行う。本来であれば事実的「条件」・仮定的「条件」の双方を併せて検証していければ最善であるが、既存のコーパスでそのような二つの産出を導く場面が十分に設定されているものは管見の限り見当たらない。そこで、まずは仮定的「条件」に焦点を当て、中上級学習者の使用実態を分析する。

2.3 研究範囲と研究課題

本研究では、「条件」という概念がどのように表されているかに焦点を当て、「条件」とは「ある事態と別の事態との依存関係を表す」(益岡・田窪 1992) と定義する。この「依存関係」にはさまざまな意味があるが、ヤコブセン (1990) は「関係性」という概念を用いて、条件文の時間的性質の観点から説明を試みている。ヤコブセンは、日本語の条件表現は依存的な関係という枠の中で、前節⁴が後節より前に発生する事態や、後節と同時に存続する事態を表す場合があるが、それより後に発生する事態を表す場合はないと述べている。そのことから、前節は後節よりも意味的に「先」であり、命題論理学における真理関数説では説明できない両節間の入れ替え不可能な依存関係があり、この依存関係は具体的には様々な形をとるが、一方的に流れるという時間そのものの基本的非対称性に由来しているとしている。そして、どんな事柄が依存関係に入り得るかという問題は、結局どんな事柄が時間の流れに沿って共起し得るかという問題と同じことであると述べている。さらに、「関係性」は二つの出来事の間には法的な、或いは場合により因果的な関係があるという認識にまで到している。このように、二つの事態を結びつける関係性は、その原形において、一方の事態が先にあって、もう一方の事態が時間の流れにそってそれに付随するという、時間的共起性に過ぎないとしている。本研究ではヤコブセン (1990) に倣い、時間的性質を考慮し、依存関係を捉える。

研究対象は順接の「条件」表現であり、「と」「ば」「たら」「なら」の4形式(以下、4形式)を目標言語形式とする。さらに形式に囚われず、目標言語形式の4形式を使用せずとも「条件」を表現するものや誤用も研究対象に含め、その形式は限定しない

4 ヤコブセン (1990) では前件・後件を前節・後節と称している。

ため、「条件」表現と呼ぶこととする。なお、逆接条件の接続辞（「ても」「のに」など）や、4形式を含む語であっても前件・後件の間に依存関係がないもの（並列・列挙、発言の前置き、モダリティ表現の一部など）は、「ある事態と別の事態との依存関係を表す」（益岡・田窪 1992）という「条件」の定義に反するため、本研究の対象外とする。

条件表現の用法については数多くの研究がなされており、その分類も研究者によって異なる。本研究は学習者が「条件」の概念を表すためにどのような形式を使用するのか、またその言語形式にはどのような意味機能が担われているかを見るのが目的であり、詳細な各用法の使用を分析することは目的ではない。そこで本研究では、学習者が産出する際に重要となるのは、「条件」を含む部分が事実かそうでないかであると考え、事後的「条件」と仮定的「条件」の二つに大別する。これは、前田（1991）の分類を参考にしたもので、前件のリアリティー（＝事実関係）が事実か否かを基準に分類した。

前田（1991）は、条件文の最も基本的な機能とは、仮定的な関係を表せるかどうかであるとし、「仮定的」とは「事後的」なリアリティーに対するものと述べている。具体的には、リアリティーが未定である場合（＝「仮說的」）と、事実と反する事柄をそれが実現した場合を想定して仮定する場合（＝「反事後的」）の二種類に分類している。このことから、本研究における仮定的「条件」とは、「事後的」な関係にないもの、つまり事実関係が未定のもので、事実と反した事柄を想定して仮定しているものを対象とする。

なお、前田（1991）の分類では、日本語記述文法研究会編（2008）で仮説条件文・反事実条件文としてまとめられている用法の中に、事後的なものがあるとしている（①～②参照）。これらの前件部分は事実であり、実際に発生した、もしくは発生していることである。このような事後的な仮説条件文、反事実条件文については事後的「条件」に分類し、本研究では仮定的「条件」のみを対象とするため、研究の対象外とする。さらに、前田（1991）で接続詞的用法、つまり非仮定的とされる「できれば」のような語句については、仮定的な文脈で使用されている場合、研究対象に含める。これは、確かに日本語のテキストの中では接続詞的な働きをすることもかもしれないが、学習者言語を見るという観点から考えると、接続詞的な働きかどうかは学習者には関係なく、「できる」という動詞＋条件の文法項目「ば」として学習者は使用しているのではないかと考えたためである。

- (1) ここまでくれ【ば】、あと一週間ほどで、花を開くだろう。（前田 1991）
- (2) 「いいお店ですね。ちっとも知りませんでした。明子さんの店【なら】、是非、オープンの際にうかがいましたのに……」（前田 1991）

研究課題は下記二点を設定する。

(研究課題 1) 中上級学習者が仮定的「条件」を表現するために使用する、書き言葉における接続辞について、4形式の使用実態を、さらに4形式を用いないときにはどのように仮定的「条件」を表現するのかその使用実態を明らかにする。

(研究課題 2) 仮定的「条件」の場면을表現する際、他の語句で意味概念を補足するか、つまり仮定を連想させる語句を付随させて表現する傾向にあるか、そして習熟度によってその使用語句が異なるか分析を行う。

3. 調査方法

「YNU 書き言葉コーパス」のタスク 6 を用いて分析する。タスク 6 の概要は、病院閉鎖が検討されているため、その存続を求め新聞に意見を投書するというものである(金澤編 2014)。つまり、病院閉鎖という仮定的「条件」の場面が設定されているため、その場면을どのように表現するかを見ていくことで **function-to-form** の観点からの分析が可能であると判断した。

また、YNU 書き言葉コーパスの調査対象者は、日本語能力試験の N1 や旧日本語能力試験の 1 級を取得している学習者が大半で、また学習歴、日本滞在歴が長い人も多く、中上級学習者と言える。大関(2008)の調査対象者は初級の上～中級の下であったため、YNU 書き言葉コーパスを用いることで先行研究にはない中上級以上の学習者を分析することができる。なお、YNU 書き言葉コーパスは日本語母語話者・韓国語母語話者・中国語母語話者各 30 名のデータであり、学習者は全タスクにおける評価結果から 20 名ずつ上位群・中位群・下位群に分けられている。今回は日本語の習熟度によってどのような差異があるか見ていくことを目的とするため、グループによる違いを取り上げる。このグループというのは、あくまで YNU 書き言葉コーパスにおける全タスクの評価結果に基づいたものであるため、厳密には習熟度とは異なるが、相対的な分析基準として用いる。また、各グループと日本語母語話者の比較を行うべく、使用率⁵も併記する。

分析方法は、まず仮定的「条件」を表す場면을対象に、4形式を含む文を、そして4形式を用いなくても仮定的「条件」の場면을表現している文を抜き出し、どのような表現を使用しているのか分析していく。

4. 調査結果

調査結果を表 1⁶にまとめる。また、4.1 全体の傾向、4.2 「条件」表現の 4形式の使用傾向、4.3 「条件」表現の 4形式を用いないときの傾向、4.4 仮定を連想させる語句や強調表現など他の語句の付随に分けて結果を述べる。

⁵ 使用率は、各項目の使用数を当該グループの総使用数で割って算出した。

⁶ 表 1 における使用率は小数第 3 位を四捨五入して算出したため、合計が 100%になっていないものもある。

4.1 全体の傾向

一人当たりの仮定的「条件」の使用数⁷は、日本語母語話者は1.8回、学習者は下位群2.2回>中位群1.9回>上位群1.4回と、上位群になるにつれて減少した。そして、母語話者は4形式を用いない表現も多くみられるが、学習者は4形式を多く用いる傾向がある。つまり、中位群・下位群では「条件」の文法項目である4形式を用いて仮定的「条件」を表現し、1テキスト中に約2回用いているが、4形式による仮定的「条件」を頻繁に繰り返してしまうと稚拙に感じられてしまう（(3)参照）。そのため、上位群になるにつれてその使用数が減少するのではないかと考えられる。一方、日本語母語話者は上位群よりは仮定的「条件」を多く用いるが、4形式だけでなく、4形式以外でも表現しているため、中位群・下位群に見られるような稚拙な印象を与えないのだろう（(4)参照）。

(3) 先日の会議で横浜市民病院は、経営困難でもう閉院する状況になると議論したのですが、私は、この前に市民の意建をちょっとアンケート調査の形で耳にしました。市民達はやはり、横浜に産婦人病院とリハビリセンターがないので、病院はもし閉め【たら】、市民達はもし万が一あつ【たら】、助けてもらうところがないから、すごく不安ですと皆の声が多いです。だからできれ【ば】市民病院はそのまましてほしいです。経済的な問題は政府に直接に言つ【たら】どうかと思います。政府は国民の健康を守る義務があるのです。だから、市民を不安させることよせてほしいです。よろしく願いいたします！[下位群 C013 全文]

(4) 「赤字の公立総合病院、存続を」 私の住む〇〇市では、経営難のために市民総合病院の閉鎖が市議会で検討されています。市の財政が逼迫しており、もはや病院にまで財源を確保する余裕がない、というのが、その理由です。しかし、この病院には、周辺市町村にはない産婦人科とリハビリテーション科があります。もし閉鎖される【と】、産婦人科へは10km離れた〇〇市、リハビリへは〇〇山地を越えた〇〇県〇〇市という20kmも離れたところまで行かなければなりません。〇〇市を通る県道は冬期は通行止めとなることが度々あり、バスも頼りになりませんし、〇〇県へ向かう鉄道も1日5本しかないのです。このような環境になってしまつて【は】、妊婦さんや増えつづける高齢者へのサービスの低下は避けられません。特に、前者は母子双方の命にかかわる問題です。閉鎖せずに、県や民間への譲渡、第三セクター方式での存続を考慮に入れた議論を、市議会では行ってきたのでしょうか。こういった選択肢を容易に捨てないでほしいと思い、市民病院の存続を切に願います。[J012 全文]

4.2 4形式の使用傾向

4形式の使用について、中位群以外では「たら」の使用が最多であり、その使用率

⁷ 一人当たりの使用数は、各グループの総使用数を当該グループの総人数で割って算出した。

は下位群 47% > 日本語母語話者・上位群 33%であったが、中位群では「と」37% > 「ば」29% > 「たら」23%の順に使用されていた。また、「と」は下位群 19% < 上位群 30%であるのに対し、「ば」は下位群 28% > 上位群 15%と逆の傾向であった（表 1 参照）。つまり、中位群が最も多く用いた「と」は上位群になるにつれて使用数が増加する一方、2番目に多い「ば」は減少する傾向にある。

次に母語による差異について述べる。「たら」ではどのグループでも目立った差異は見られなかったが、「と」では下位群、中位群では差異はないものの、上位群では 8 回中 6 回が中国語母語話者の使用であった。さらに「ば」では、韓国語母語話者は下位群で 2 回、中位群で 1 回見られただけで、それ以外はすべて中国語母語話者であった。つまり、上述した「と」が中位群 < 上位群、「ば」が中位群 > 上位群になる傾向は、中国語母語話者の傾向と言える。

表 1 グループ別・形式別の使用

グループ	形式	仮定的「条件」		仮定を連想させる語句の使用数(回)	
		使用数(回)	使用率	「もし」	その他
母語話者	たら	18	33%	7	2
	と	11	20%	2	0
	ば	7	13%	1	0
	なら	0	0%	0	0
	4形式以外	19	35%	3	0
	計	55	101%	13	2
上位群	たら	9	33%	5	0
	と	8	30%	2	1
	ば	4	15%	1	0
	なら	0	0%	0	0
	4形式以外	6	22%	0	0
	計	27	100%	8	1
中位群	たら	8	23%	5	0
	と	13	37%	1	3
	ば	10	29%	2	0
	なら	0	0%	0	0
	4形式以外	4	11%	0	0
	計	35	100%	8	3
下位群	たら	20	47%	5	3
	と	8	19%	2	0
	ば	12	28%	1	0
	なら	1	2%	2	0
	4形式以外	2	5%	0	0
	計	43	101%	10	3

4.3 4形式を用いないときの傾向

4形式を用いない場合（表 1 4形式以外の欄参照）、日本語母語話者では 35%であ

った。産出された形式は、学習者にも同様に見られた「～場合」「～は」「～時」以外に、「～ことで」「～ことも」「～には」「～限り」「～としても」「連体修飾」など様々なバリエーションが見られた ((5)～(7)参照)。なお、(5)の「～ことで」は手段を表す用法であるが、前件・後件の間に依存関係があり、病院閉鎖という仮定的な設定が成立した場合、つまり仮定的「条件」の中での可能性を表現しているため、仮定的「条件」に該当すると考える。(7)の「連体修飾」については、当該地区には閉鎖が検討されている病院にしか産婦人科がないため、病院閉鎖がされてしまうと、出産時に遠方の病院にいかねばならなくなってしまうということを、「連体修飾」で表現している。そして、そのような街になってしまったら、社会福祉があるとは言えないのではないかと述べている。つまり、「病院が閉鎖し産婦人科がなくなってしまう」ことで「遠方まで出向かなければならなくなる」という仮定的な場面が成立し、「社会福祉がなくなる」ということになる。この「病院が閉鎖する」ことは「社会福祉がなくなる」ことよりも時間的に「前」になり、両者を入れ替えることはできない。つまり、非対称性が存在する。そして、「病院が閉鎖されれば」、「社会福祉はなくなる」が、「病院が閉鎖されなければ」、「社会福祉はなくなる」というように、両者の間にはヤコブセン (1990) のいう時間的共起性のある依存関係が成立する。以上のことから、(7)は仮定的「条件」に該当すると考える。

- (5) この病院がなくなる【ことで】、遠い病院に診察に行かなければならなくなる人が多く出てくると思います。【J008】
- (6) この町も、人口の減少、医師の減少により病院閉鎖に追い込まれているわけではありますが、今後のこの地域を支える若年層や子どもたちが増えないこと【には】、これと類似した問題は途絶えることはないでしょう。【J005】
- (7) 出産直前の一刻を争うときに遠方まで出向かなければならない街のどこに社会福祉があるのでしょうか？～私は、市民にとって何が最も重要かを見誤る市政に断固反対します。【J011】

一方、学習者は、下位群 5% < 中位群 11% < 上位群 22% と上位群になるにつれて増加してはいるが、日本語母語話者には及ばない。さらに、学習者に見られた表現は、「～場合」4回、「～は」5回、「～時」2回と限られた形式だけであった ((8)～(9)参照)。また、文全体で仮定的場面を表しているものもあった ((10)参照)。そして、母語による差異は見られず、母語に限らず4形式を用いないで表現する傾向にはなかった。

- (8) その対策として、閉鎖が決定された【場合】、市民総合病でしか扱っていなかった分野における診療を新たに設ける必要がある。【上位群 K026】
- (9) こんな状態で〇〇市の市民総合病院を閉鎖するの【は】もっと市民たちを 심각한状態に落ち込ませます。【下位群 C008】

(10) 万が一病院が閉鎖をしたと仮定します。 [中位群 K035]

4.4 仮定を連想させる語句や強調表現など他の語句の付随

2.2 で述べたように、思考的負担が高いとされる仮定的「条件」では、接続辞やそれに相当するものだけでなく、それ以外の他の語句で仮定条件の意味概念を補足して表現する可能性がある。そこで、本項ではそのような仮定を連想させる語句について調査結果をまとめる。さらに、仮定的「条件」の中で、疑問の投げかけや反語の表現を使用する傾向が日本語母語話者に特有なものとして見られた。この点についても併せて述べる。

仮定的「条件」の文の中で、「もし」「かもしれない」「一旦」「万が一」という仮定を連想させる語句が確認でき、「一旦」「万が一」については学習者にのみ使用が見られた。これら仮定を連想させる語句の使用率は、日本語母語話者 27%に対し、学習者は下から 30% < 31% < 33% と上位群になるにつれて高くなっていったが、大きな差異は見られなかった。そのうち、「もし」の使用率が圧倒的に高く、日本語母語話者は 87%、学習者は下から 77%、73%、89% と、ここでもグループによる差異はあまり見られなかった。さらに、全グループにおいて「たら」との共起が最も多く、「もし」を使用した文のうち「たら」と一緒に使用されていたのは、日本語母語話者 54%、学習者は下から 56%、63%、63% であった。そしてこれら仮定を連想させる語句の使用について、「一旦」は中国語母語話者にしか使用が見られなかったが、それ以外では母語による差異は見られなかった。

さらに、日本語母語話者特有の傾向として、疑問の投げかけと反語の表現が見られた ((7)(11) 波線部分)。これらを使用している人はそれぞれ 15 名・3 名、両方使用している人は 2 名と約 67% がどちらかの表現を使用していた。一方で、学習者については、前者が上位群で 4 名、中位群・下位群で各 3 名しか使用が見られず、後者は上位群の 1 名のみであった。また、日本語母語話者の使用について仮定的「条件」との関係を見てみると、疑問の投げかけでは 48% が仮定的「条件」と一緒に使用され、その内訳は「たら」が約 62% と最も多かった ((11) 参照)。反語では 22% であり、すべて 4 形式ではない形式と一緒に使用されていた ((7) 参照)。

(11) 【もし】、病院が閉鎖されてしまっ【たら】、その人たちは一体どうすればよいのだろうか。 [J017]

5. 考察

本調査結果から、学習者には 4 形式の使用が多く見られ、4 形式を用いない表現は限られていた。しかし、この 4 形式の使用について、上位群・下位群・中位群のグループごとに異なる使用傾向が見られた。つまり、(i) 全グループで「たら」が多用されるが、下位群では約半数が「たら」を偏重する傾向が見受けられる一方、中位群では減少するが、上位群になるとその使用割合は日本語母語話者に近づき、偏りが少な

くなっていくこと、(ii) 中位群では「たら」よりも「と」「ば」が多く用いられ、(iii) 中位群が最も多く用いた「と」は下位群より上位群の方が多く使用するが、2番目に使用数の多い「ば」は上位群で減少する傾向にあるということである(図2参照⁸⁾)。そしてこの傾向は中国語母語話者に顕著な傾向であった。

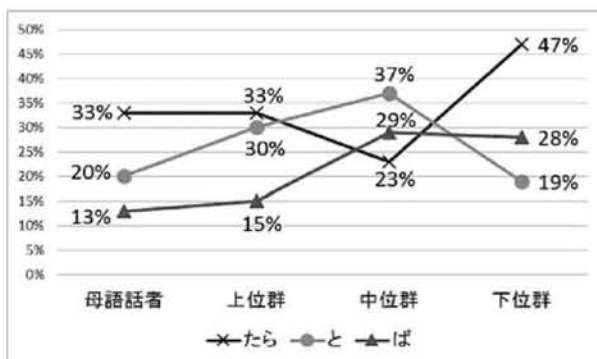


図2 グループ別4形式の使用率の推移

本項では、グループによる4

形式の使用率の推移がなぜ起こるのか、その原因について考えていきたい。具体的には、各グループでどのような表現が使用され、4形式とどのような関係が見られるのか、「条件」内部の述語部分に着目しながら見ていきたい(以下、表2参照⁹⁾)。

まず、日本語母語話者に顕著なものとして、使用する動詞が「閉鎖される」と「なくなる」に偏っていることがあげられる。特に「閉鎖する」の受動態「閉鎖される」は日本語母語話者で10回使用されているのに対し、学習者では各グループで1~2回しか使用されていない。「なくなる」については、日本語母語話者は15回使用しているのに対し、学習者も上から8回、9回、10回と多く使用している。また、日本語母語話者独自の傾向として、「てしまう」を併用することが挙げられ、「たら」で10回、「と」で5回、「ば」で4回の計19回も使用されていた。一方、学習者で「てしまう」を使用したのは、上位群・下位群で各2回のみであった((12)参照)。

(12) もし、市民総合病院がなくなっ【てしまっ】【たら】町の人々に及ぼす影響はすごく大きいと思う。[上位群 K006]

学習者のグループ別の傾向としては、上記で述べた通り、「なくなる」が多用される傾向があるのに加え、上位群では「閉鎖する」「閉鎖になる」などの「閉鎖」がつく漢語動詞を使用する傾向にあるが、中位群では「閉じられる」、下位群では「閉める」など和語動詞が使われていた。さらに、中位群・下位群ではそれ以外の動詞、例えば「停止となる」「廃止される」「倒産する」などさまざまな表現が見られ、さらに「ない」「なくす」「できる」「ていただく」も使用されていた。

次に、各4形式の傾向を見ていきたい。まず、「たら」「と」について全グループで「なくなる」が用いられる傾向が見られた。しかし上記でも述べた通り、日本語母語話者では「閉鎖される」も多く使用され、さらに「てしまう」を併用している。下位

⁸ 図1は表1の「たら」「と」「ば」の部分を取り出してグラフ化したものである。なお、「なら」については下位群で1回産出が見られただけであるため、図1には記載していない。

⁹ 表2の空欄部分は、産出が見られなかったことを示す。

群では「たら」のときに「なくす」も多く使用され、さらに「閉める」「閉じる」「解散する」「倒産する」など多くのバリエーションがあり、その傾向は一樣ではなく不適切な使用も多い。中位群になると動詞のバリエーションは下位群より少なくなり、「停止する」「廃止する」など不自然な使用も見られるが、そのほとんどが「と」と一緒に

表 2 グループ・形式別 仮定的「条件」の使用傾向

グループ・形式別	述語部分	総計	閉鎖する	閉鎖になる	閉鎖される	閉める	閉まる	閉められる	閉じる	閉じられる	なくなる	なくす	言う	行く	できる	する (名詞)である	ない(形容詞)	そのほか(形容詞)	ない(助動詞)	てしまう	とする	となる	ことになる	なければならぬ	ていただく	そのほか	
																											たら
NS	たら	28									8									10				1			
	と	15	2	1	1						4									5		1				1	
	ば	12	1								3						1			4		1				2	
	計	56	3	1	10						15						1			19		2		1		4	
上	たら	11		2	1						4						1			1	1					1	
	と	9	1			1					3							1	1	1			1			1	
	ば	5								1								1		1		1				2	
	計	23	1	2	1	1					8						1		1	2	2		1			3	
中	たら	9			1					1	4						1							1		1	
	と	14									5						2					1				6	
	ば	10	1		1									1	1	1	1	1							2	1	
	計	33	1		2					1	9			1	1	1	1	4				1				8	
下	たら	21			1	2			1		5	4	1						1		1	1				4	
	と	9						1			5							1			1					1	
	なら	1					1																				
	計	43			1	2	1	1	1		10	4	1							2	2	1				2	

使用しており、「たら」で使用しているのは1回しかなかった。さらに、「ば」については、下位群ほどその使用数が多く、上位群になるにつれて減少する傾向が見られた。下位群での「ば」の使用は、「できる」や形容詞「ない」、助動詞「ない」、「ていただく」など決まった形で使用されており、「できれば」「なければ」「ていただければ」という形で覚えて使用している可能性がある((13)~(14)参照)。そして中位群になると、その決まった形での使用から、「行く」「する」など基本動詞や助動詞「ある」へその使用範囲が広がっている様子が見られ((15)~(16)参照)、上位群になると「ば」の使用は減少し、日本語母語話者の傾向に近づく。

- (13) それだけではなく、病院が【なければ】、ここに住んでいる人の数がもっと少なくなります。【下位群 C022】
- (14) 若者どころか、当地つまりこの辺の年を取った人や、妊娠している方に特に不便だと思うので、【できれば】国家や現在の医療システムなどの力を借りて今の上まで當んで行っ【ていただけれ】【ば】ありがたいと思います。【下位群 C012】
- (15) 市民総合病院はなくなるとほかの婦人科がある病院に【行け】【ば】一番近い病

院に行っても車で30分ぐらいかかります。【中位群 C010】

- (16) 婦人産科とリハビリセンターは行動に不自由な方々が利用していて、遠くにある病院で【あれ】【ば】、意味はありません。【中位群 C038】

以上のことより、4形式の使用率の推移には、従属節内の述語部分の選択が関係していると考えられる。つまり、述語部分を選択するのに負荷がかかり接続辞にまで気が回らず、下位群では最も容易で汎用性のある「たら」を多用するが、中位群になると、述語部分の選択に不適切さは残るものの徐々に接続辞にも注意が向けられ、「たら」にばかり偏重せず、「と」「ば」を使い始めているということである。さらに「ば」については、まずは決まった形で多用され、徐々に他の形へと広がりながら日本語母語話者の使用に近づく傾向にあった。また4.1で述べた通り、下位群・中位群では1テキスト中に約2回「条件」表現を使用しているため、「たら」ばかりを使用してしまうと、同じ形式が連続し、単調で稚拙な文になってしまう。それを回避しようと、中位群の学習者なりに工夫し、「たら」以外の形式である「と」「ば」に分散して「条件」を表現する可能性もあるだろう。

6. まとめと今後の課題

「条件」表現について、中上級学習者を対象にYNU書き言葉コーパスを用い、「と」「ば」「たら」「なら」の4形式がどのように使用されるか、そして4形式を使用しないときには、仮定的「条件」をどのように表現するか分析を行った。

以下に、研究課題に対する結果と日本語教育への示唆をまとめる。

(研究課題1)

4形式の使用について、全グループで「たら」が多用され、特に下位群で偏重する傾向が見られた。その一因には、述語部分を選択する際に負荷がかかり、「条件」表現の選択に影響している可能性に言及し、述語部分の選択による負荷が減少すると「と」「ば」の形式も増え始め、「たら」への偏重が少なくなっていくことが考えられる。さらに、「ば」については決まった形で使用する傾向が見られ、そのため下位群で多く使用され、上位群になるにつれてその使用が減少していく可能性がある。この「と」「ば」のグループによる使用傾向は、本調査では中国語母語話者の傾向であった。この結果から一概に4形式の習得過程を述べることはできないが、4形式以外の部分が4形式の使用に影響している可能性があるということは、今後研究を進展させていくことで、学習者特有の使い分けや習得過程を明らかにする手立てとなり得るだろう。

一方、日本語母語話者は4形式を用いず多様な形式で仮定的「条件」を表現していた。しかし、学習者は4形式の使用に偏っており、4形式以外の使用は使用数も少なく、バリエーションも乏しかった。これは、現在、教室指導で4形式に重点を置いているが、形にばかり固執するのではなく、「条件」をどのように表現するか

という新しい指導の枠組みを考える必要性を示唆している。本研究の結果からではどのレベルでどのように行えば良いかなど詳細までは言及することはできないが、今後検討していく価値は十分にあり、形式・用法に囚われず機能的な分析を行ったからこそ明らかになった意義ある結果であると考えられる。

(研究課題2)

仮定的「条件」を表現する際、全グループで約3割が仮定を連想させる語句とともに使用されていた。ここから、思考的負担が高いと想定される仮定的「条件」では中上級学習者でも仮定を連想させる語句で補足しながら表現する傾向にあると言える。一方、どのような語句を使用するかについては、グループによる差異は見られず、「もし」が約8割を占めていた。さらに、日本語母語話者において、仮定的「条件」は疑問の投げかけ・反語とともに使用される傾向が見られたが、学習者ではあまり見られなかった。そしてこの「もし」を使用する傾向は、母語による差異がなく、中国語母語話者、韓国語母語話者に共通した傾向であった。

上記でまとめた調査結果について、疑問が残る部分もある。研究課題2についてだが、日本語母語話者についても同じ傾向が見られたことである。これは、新聞への投書という性質上、自分の主張を強調するために、仮定を連想させる「もし」などの表現を取って使用したことが考えられる。また、日本語母語話者は疑問の投げかけ・反語の表現を約67%が使用されていたことから、世論へ訴えかけるために、病院が閉鎖するという仮定的場面を強調して表現した可能性が窺える。

このように、日本語母語話者の「もし」の使用には、ある特定の使用範囲が存在する可能性があるが、学習者も同様にその使用範囲を意識して使用しているか本調査結果からでは判断できない。そこで、本稿では新聞に自分の意見を投書するというタスクを用いたが、今後は自分の意思が入らない客観的な物語の描写を調査素材として用い、さらなる検証を行う必要がある。

また、本稿では仮定的「条件」のみを対象に分析を行い、仮定的「条件」では仮定を連想させる語句で補足する傾向が見られたが、今後は事実的「条件」と仮定的「条件」双方の場面を設定して、検証を行う必要がある。つまり、産出の際の思考的負担が少ないとされる事実的「条件」は他の語句で意味概念を補足する傾向にないが、思考的負担が高いとされる仮定的「条件」では他の語句で補足しながら表現する可能性について検証していきたい。そのためにも、書き言葉だけでなく、即時的な反応である話し言葉ではどのような傾向が見られるのかも分析していきたい。

参考文献

- 網浜信乃(1990)「条件節と理由節—ナラとカラの対比を中心に」『待兼山論叢 日本学篇』24, pp.19-38.
 大関浩美(2008)「学習者は形式と意味機能をいかに結びつけていくか—初級学習者

- の条件表現の習得プロセスに関する事例研究」『第二言語としての日本語の習得研究』11, pp.122-140.
- 小柳かおる・峯布由紀 (2016) 『認知的アプローチから見た第二言語習得—日本語の文法習得と教室指導の効果—』くろしお出版
- 迫田久美子 (2002) 『日本語教育に生かす第二言語習得研究』アルク
- 田中真理 (2005) 「学習者の習得を考慮した日本語教育文法」野田尚史 (編) 『コミュニケーションのための日本語教育文法』 pp.63-82. くろしお出版
- 豊田豊子 (1977) 『と』と『～とき (時)』 『日本語教育』 33, pp.90-106.
- 中浜優子 (2015) 「機能主義的アプローチに基づく第二言語習得研究—最新の研究動向と教育的示唆—」 『第 26 回第二言語習得研究会 (JASLA) 全国大会予稿集』 pp.16-21.
- 日本語記述文法研究会編 (2008) 『現代日本語文法 6 第 11 部 複文』くろしお出版
- ニャンジャローン・スック, スニーラット (2001) 「OPI データにおける『条件表現』の習得研究—中国語、韓国語、英語母語話者の自然発話から—」 『日本語教育』 111, pp.26-35.
- 前田直子 (1991) 「条件文分類の一考察」 『日本語学科年報』 13, pp.55-80 .
- 益岡隆志 (1997) 『新日本語文法選書 2 複文』くろしお出版
- 益岡隆志・田窪行則 (1992) 『基礎日本語文法—改訂版—』くろしお出版
- 峯布由紀 (2015) 『日本語教育学の新潮流 13 第二言語としての日本語の発達過程 言語と思考の Processability』 ココ出版.
- W・M・ヤコブセン (1990) 「条件文における『関連性』について」 『日本語学』 9-4, pp.93-108.
- 横瀬智美 (2001) 「異なった言語環境における日本語の習得—自然習得と教室環境での習得の比較から—」 広島大学大学院教育学研究科言語文化教育専攻修士論文
- Bardovi-Harlig, K. (2015) One functional approach to SLA: The concept-oriented approach. In B. VanPatten & J. Williams (Eds.), *Theories in second language acquisition (2nd ed.)* (pp.54-74). New York: Routledge.
- Ellis, R. & Barkhuizen, G. (2005) *Analysing learner language*. Oxford: Oxford University Press.
- Long, M. & Sato, C. (1984) Methodological issues in interlanguage studies: An interactionist perspective. In A. Davis, C. Cramer & A. Howatt (Eds.), *Interlanguage* (pp.253-279). Edinburgh: Edinburgh University Press.
- Mitchell, R., Myles, F. & Marsden, E. (2013) *Second language learning theories (3rd ed.)*. New York: Routledge.
- Solbin, D. I. (1993) Adult language acquisition: A view from child language study. In C. Perdue (Eds.), *Adult language acquisition: Crosslinguistic perspective vol. 2*. (pp.239-252). Cambridge: Cambridge University Press.
- Takano, Y. & Noda, A. (1993) A temporary decline of thinking ability during

foreign language processing. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, 24, pp. 445-462.

調査資料

YNU 書き言葉コーパス：『日本語教育のためのタスク別書き言葉コーパス』金澤裕之（編），ひつじ書房，2014

（はない あい・首都大学東京博士前期課程）